**「お釈迦様の物語とたとえ話」**

スワーミー・ディッヴィヤーナターナンダ

「ブッダ」という言葉は、実際には「悟りを開いた人」を意味します。ゴータマ・ブッダとして世界に知られるアジアの偉大な預言者は、スッドーダナとマーヤ・デーヴィの間にシッダールタとして生まれました。スッドーダナは釈迦族の長でした。その王国の贅沢な生活もお釈迦様を長く繋ぎ止めておくことはできませんでした。ある日、宮殿の外に出たときお釈迦様は、病人、老人、死体を目にしました。人生で初めてそれらを見た彼の意識は揺さぶられ、人生の目的について深く考えました。なぜなら、人間の人生には数え切れないほどの苦しみがあり、それらはきっと自分にも訪れるだろうと感じたからです。そして、人生の目的とは何か？　なぜ人は苦しむのか？　苦しみを取り除くことはできるだろうか？　と考えました。これは偉大な人物の突出した特徴です。彼らは通常の物事や状況を私たちとは異なる視点で見るのです。

シュリー・ラーマクリシュナがドッキネッショルで聖母バヴァタリーニを崇拝し始めたとき、彼は「この『母』は本物だろうか、それとも粘土の像にすぎないのだろうか？」と自問しました。「彼女は本当に供え物に召し上がっているだろうか？　彼女は私たちの祈りを聞いてくださっているだろうか？」　このような種類の質問が私たちの心に浮かぶことはほとんどありません。シッダールタ王子は宮殿の贅沢さに極度の嫌悪感を抱き、自分が探している疑問の答えを見つけ出すことを切望するようになりました。そして、彼は世を捨てて隠者になったのです。彼は真実を知るために極度の辛苦に耐えました。彼の体はボロボロになりました。ついに彼は、極度の肉体的辛苦をなめても、どこにも到達できない、だから中道を歩まなければならない、ということに気づきました。彼は最終的にブッダガヤで涅槃（ニルヴァーナ）に達しました。ブッダが得た真理とは「人生全体の根底にある真理とはすなわち、人生は苦しみに満ちている（苦諦）、煩悩が苦しみの原因である（集諦）、煩悩を滅ぼすと苦しみは終わる（滅諦）、正しく生きることで煩悩は滅ぼされる（道諦）」というものです。これらは四大真理（四聖諦）として知られており、彼の教えはこれら四聖諦に基づいています。

そして彼は、自分の意識の深い部分から受け取った真理を全人類に共有することを決意しました。彼はベナレス近郊のサールナートで最初の説法を行い、その後ゆっくりとインドのさまざまな地域へ赴きました。悪評高い人や一般の人だけでなく、多くの王や教養ある男女も彼の弟子になりました。

また、彼の妻と息子も出家して比丘（修行者）になったのです。ブッダの名声は世界の他の地域にも広がりました。彼は80歳まで生きました。

ブッダは儀礼や儀式をあまり重視せず、代わりに道徳と倫理を重視しました。彼の教えはシンプルで実践的でした。

ゴータマ・ブッダは説法の中で面白い逸話やたとえ話をよく用いました。今日はそれらのたとえ話のいくつかをお話します。

あるところに金持ちの愚か者がいました。ある時、隣人が３階建ての建物を建てたので、嫉妬して自分も同じような建物を建てることにしました。そこで大工を呼んで、何が欲しいのか説明しました。大工はまず建物の基礎を作り、次に 1 階、その次に 2 階を作りました。この時点で金持ちの男はじれったくなって言いました。「どうして全部を作らなくちゃいけないのだ？　私は３階だけを作ってほしい、それだけなんだ！！」

この物語は、目標があるならまず基礎を整える必要がある、ということを教えてくれます。初めの一歩からやらなければ、結果は出ません。最初のステップを無視して、やみくもに取り組んでいては、目標に到達することはできません。

悟りを求める人々のために、ゴータマ・ブッダは 三つの実践方法を定めました。行動規範（戒）と正しい集中（定）、そして智慧（慧）の三学です。たとえば、農夫が収穫を得るには、まず田を耕し、田が整えば水を引き、最後に種をまきます。時々生えてくる雑草を丁寧に取り除く、それを何日も根気よく続けます。今日に土地を耕し、明日に種を蒔き、明後日に刈り入れることなどできません。

農夫が良い作物を得るためには辛抱強くあらゆる大変な労働をするのと同じように、悟りの道を歩む人は、人徳を養うことで心を耕し、識別の助けを借りて悪い欲望を取り除かなければなりません。それから集中力と智慧の種を蒔きます。この過程を道に沿って進めば、やがて悟りに達するでしょう。

悟りを求める時、人は目標に焦点を合わせ、大切な目標へと向かわせる実践を配置すべきです。そしてその目標から離れないように注意する必要があります。この事実を説明するために、ブッダはこのようなたとえ話をされました：

水の流れに乗って運ばれている木の丸太は、地面に落ちたり、誰かに持ち去られたり、腐ったりしなければ、いつかは海にたどり着くだろう。同様に、悟りを探求する者はマーヤの罠に注意し、非実在のものの外側の美しさに惑わされないようにすべきです。時々、霊的探求者は厳しい苦行を重要視しすぎて自分の体を苦しめますが、霊的生活の大きな進歩ができません。一方で、求道者の中には、放棄したことをいたずらに栄光だと思い上がっている人もいます。ですので、これらに巻き込まれないように注意してください。これらを念頭に置いて霊的実践を怠りなく行えば、最終的には涅槃に至ることができるでしょう。巻き込まれるのは、注意を怠り、識別せず、目的よりも方法に熱中している人だけです。

悟りを求める探求者がこの人生の旅を行くとき、多くの不快なことに遭遇し、それが心に一時的な混乱を引き起こすでしょう。ではどう対処すべきでしょうか？　このことを説明するために、ゴータマ・ブッダは次のように言いました：

人には3種類ある。一つ目は岩に刻まれた文字のような人。彼らが怒ると、その怒りと恨みは彼らの心に永久に刻み込まれます。二つ目は砂の上に書いた文字のような人です。砂に書かれた文字は、すぐに消すことができるように、彼らは怒ることもありますが、その怒りはすぐに消えてしまいます。三つ目は水に彫られた文字のよう人です。水に彫られた文字は一瞬たりとも痕跡を残さないように、悪口や批判も彼らには触れることすらありません。彼らは少しも影響を受けないのです。

私たちの生活や周囲の世界には、暑さと寒さ、喜びと悲しみ、金持ちと貧乏、などのような正反対の力の働きがあります。私たちは常にそれらに適応しなければなりません。人生はいつも甘くて素晴らしいものとは限りません。不穏な状況が生じた場合、私たちは忍耐強くそれに向き合い、我慢しなければなりません。ブッダは次のように例えました：

ある時、ヘビの頭と尾の間で争いがありました。尻尾は「頭がいつだって先に行くのはだめだ」と主張しました。頭は「尻尾がそんなことを言うのはばかげている、尻尾が常に後ろにいるのは当たり前じゃあないか。そこにいろよ」と言いました。そこである日、両者の間で綱引きをしました。最終的にヘビは二つに分かれて終了しました。

ブッダご自身は厳しい苦行を遂げた後、あまりにも厳しい苦行をしてもどこにも導かれない、と感じました。そこで、苦行をしすぎない、楽をしすぎない、中道を選択することになさいました。このようなたとえ話があります。

ある時、シュローナという名の霊的求道者がいました。彼は悟りを開くことを熱心に求めていたので、厳しい肉体的苦行を行いました。ついに体から出血が始まりました。これを見た師はシュローナに「竪琴を見たことがあるかね？　締めすぎても正しい音が鳴らないし、緩めすぎても正しい音が鳴らない。つまり、求めている音を出すには、調律が最適でなければならないのだよ。それと同じように、肉体的苦行を行うとき、中道を歩むことを心に留めておく必要がある。あまりにも厳しい苦行は体と心を弱らせる。また贅沢に溺れると、人生は気楽で心は浅薄になり、悟りへの熱意は減るのだ」と言いました。

次の説明は、鉄の意志と決意が不可能を可能にするという事実を強調しています。

ある時、ヒマラヤ山脈の竹林の中に、一羽のオウムが住んでいました。他にもたくさんの鳥や動物が平和に暮らしていました。ある日、竹と竹が擦れ合って火が発生し、火災は急速に広がり始めました。鳥や他の動物たちは命を守るためにあちこちに逃げ始めました。しかし、オウムは火を消すための方法を探しました。近くに大きな池があったので、オウムはすぐにある計画を思いつきました。オウムは池まで行って池の水に浸かり、火事の場所に戻ってきて、そこに水を滴らせ始めました。何度も何度もそこに行き、同じことを繰り返しました。天の神があらわれて「あなたは良い心をしていますが、そうすることでなんとかなると思っているのですか？」と言いました。するとオウムは、「純粋で強い意志さえあれば、この世にできないことはなにもありません。必要ならば、来世でも続けるつもりです」と答えました。神はお喜びになり、神聖な力でその山火事を消しました。

同様に、何百万もの誕生で生じたカルマは一度の誕生で一掃することができます。それは、固い決意で務めをやり遂げるために全身全霊を注ぎ、そして神のもとに避難するときに可能となります。霊的悟りの道には、自己努力と神の恩寵の両方が必要です。

ある王国では、年寄りを遠い山奥に捨てる風習がありました。その王国の大臣の父親も年老いていましたが、大臣は父親をその山に連れて行くが辛かったので、地下に洞窟を掘って隠しました。

ある日、神が王の前にあらわれて質問しました。「二匹のヘビがいて、その雌雄がわかるか？　どうすれば見分けられるか？」王は当惑して答えることができませんでした。そこで王は、この質問に答えられる人には褒美を与えると知らせました。大臣は父親が非常に賢いことを知っていたので、父親のところに行ってその質問をしました。父親は、「騒がしく動くのが雄で、動かないのが雌である」と言いました。（※仏教聖典P267）

次の質問は「2 頭の馬を飼っていて、1 頭は母馬、もう 1 頭はその子馬である。子馬が成長して母馬と同じ大きさの時、母馬と子馬をどうやって見分けるか？」でした。王は答えを見つけることができず、大臣に助けを求めました。大臣は再び父親のところに行くと「干し草を与えればわかる。干し草を子馬に与えている方が母馬である』という答えが返ってきました。さらに、「眠っている者に対しては覚めているといわれ、覚めているものに対しては眠っているといわれるのは誰であるか？」という質問に対しては、「それは悟りの修行をしている者である。悟りへの道を歩み始めていない人々と比べるとその人は覚めているが、すでに悟りに達した人々と比べるとその人は眠っている」という返事でした。

王はその答えにとても感銘を受けました。大臣の父親がそれらの質問に答えていることを知ったとき、王は老人を山に捨てるのは間違いであることに気づき、そのおきてをやめました。

ある村に両親に育てられた少年がいました。やがて父親が亡くなり、その後母親と二人で暮らしました。しばらくして、その少年は結婚しました。最初は幸せに暮らしていましたが、すぐに母親と妻の間に誤解が生じ始め、それが悪化して義母は家を出て別々に暮らし始めました。

しばらくして、この夫婦に子供が生まれました。すぐに、嫁が、「姑が家にいる間は、家族にいいことは何も起こらなかったけれど、別居をすると子供が生まれた」と皆に吹聴しているという噂が姑に届きました。これを聞いた姑は非常に心がかき乱されました。そして大きな怒りが沸き起り「この世から正義が消えたようだ」と言いました。姑は葬儀をして「正義」を火葬しようとしました。そこに神があらわれて、さまざまな方法で彼女を止めようとしたが無駄でした。そこで神は、「では、孫と嫁を火葬しよう」と言いました。

その時、姑は自分の間違いに気づき、神に許しを請い、嫁と孫をお守りください、と頼みました。

その時、嫁も自らの過ちに気づき、火葬墓地に行って姑を家に連れて帰りました。

スジャータはアナタピンダという裕福な商人の妻でした。スジャータは傲慢で口うるさく、些細なことで家族とよくケンカをしました。ある時、ゴータマ・ブッダがたまたま彼らの家を訪れ、スジャータの傲慢な態度を知るようになりました。ブッダはスジャータに向かって言いました。「スジャータ、知っているかい、妻には七つのタイプがあるのだよ。一つ目は殺人者のような妻。彼女の心は不純で夫を尊重しない。その結果、別の男に心を向けてしまう」

「次に、泥棒のような妻。彼女は夫が苦労して稼いだお金を贅沢や肉体的な快適さのために使い、必要であればお金を盗むことさえする」

「師のような妻もいる。彼女は家庭を支配し、夫よりも優位に立っている。彼女はよく夫を厳しい言葉で叱る」

「母親のような妻もいる。彼女は夫の世話をし、自分の子供のように扱っている」

「それから姉のような妻、友達のような妻もいる。どちらのタイプも、行動は控えめで、夫の世話をきちんとし、重大な局面では適切な手助けをする」

「最後に、下女のような妻がいる。彼女は夫や他の家族に誠実に仕える。彼女は何の期待も恨みもなく、黙って家族に仕える」

そして尊師は、「スジャータよ、あなたはどの部類に属するだろうか？」と言いました。スジャータはすぐに自分の間違いに気づき、「私も最後の人のようになりたいです」と言いました。

その後、スジャータはゆっくりと自分の行動を改め、夫によく仕え、二人で悟りを求めました。